

ベトナムのツバキと切手

箱田 直紀 (人間環境学科)

1. ツバキ切手の発行とその背景

2003年12月にベトナム社会主義共和国(以下ベトナムとする)において、ツバキの花を図柄にした切手が発行された。赤花と白花がそれぞれ1枚、黄色の花が2枚の4枚がセットになった通常切手で、金額は800ドンから6000ドン。日本円に換算すると約6円から45円ほどであるが、ベトナムの国内郵便代は封書で通常800~1000ドンであるから、5000ドンや6000ドン切手は小包や外国郵便使用ということになるらしい。

それぞれの切手には右上の金額の他に、左上にはベトナム語での植物名とラテン語の学名、左下には‘ベトナム郵政省’を意味するベトナム語が書かれている。実は、その中の1枚1000ドン切手(図7)に描かれた赤花のツバキは、1998年に筆者がハノイ大学のニン教授と連名で発表したベトナム産の新種ツバキ *Camellia rubriflora* Ninh et Hakoda である。

学名のはじめの *Camellia* はツバキの仲間(ツバキ属)を表す属名、*rubriflora* は‘ルビーのように赤い色をした花の’という意味のラテン語で種小名を示し、そのうしろは学名の命名者名である。ちなみに、後からつけられたベト



図7 *Camellia rubriflora*

ナム名の TRA DO も ‘赤いつばき’ という意味である。

また、800 ドンと 2000 ドン切手に使われた黄花の 2 種は、ベトナムがフランスの植民地であった頃に採集された腊葉標本（押し葉標本）がフランスあるいはイギリスにごく少数あるだけで、生きた植物は長く所在不明であった。それが近年になってほぼ 100 年ぶりに再発見されたものである。

とくに 800 ドン切手の *Camellia petelotii* (Merr.) Sealy (図 8) は、約 100 年前にフランスの植物探検家ペテロがベトナム北部のフランス人避暑地であったタムダオ(現在はタムダオ国立公園)で採集したという標本がパリ博物館に 1 体あるだけで、1924 年に命名発表はされたが、その後は一度も見つかっていなかった。花の色も不明で、中国などの研究者の間では白花であろうといわれてきたが、筆者は花や葉の特徴から花色は黄色と考えてきた。



図 8 *Camellia petelotii*

そのため、1994 年 12 月のベトナム植物調査では本種の再発見も重点目標とした。しかし、この調査ではニン教授らと 2 日間にわたり山中を探しまわったが発見できず、一つの国立公園とはいえ、長さが約 45km、幅 20km にも及ぶ山塊の中から全く情報もなしに探し出すことはほとんど不可能に近いと思われた。そこで、次にニン教授が考え出した案は以下のようなものであった。

ニン教授はハノイ大学理学部（その後に改名されて正式にはベトナム国家大学ハノイ科学大学となったが、本文中ではハノイ大学で通す）の植物分類学担当の主任教授であるが、植物分類学分野では、学生が山で植物を採集し、腊葉標本を作成して、さらにその標本の種名を同定するという実習がある

ので、この実習をタムダオ国立公園で実施してみようというのである。我々はこの実習が実施できるように、僅かながら資金援助をしようということになった。ところが、この計画が見事に的中した。1995年1月の実習で、学生が作成した標本の中から *Camellia petelotii* が見つかったのである。我々は翌年の開花期に自生地に行き、特徴や個体数、個体変異などを調べればよかった。本種再発見の報告は、1998年にニン教授と連名で国際ツバキ協会の会誌上で行った。

もう一つの黄花ツバキ、最も金額の高い6000ドン切手に使われた *Camellia*

gilberti (Chev.) Sealy (図9) も100年あまり前にベトナム北部で採集されて以来行方不明で、近年、中国との国境近いところで再発見された種である。古くは飲用として茶の代用に使われたらしいが、現在では全く利用されていない。花は直径1cm前後のごく小輪で観賞価値はない。本種が切手の金額として一番高い理由についてはわからない。現在、日本や欧米で注目されている順番からすると、切手の金額とは全く逆になるので、金額の低い方が封書として利用頻度が高い



図9 *Camellia gilberti*

と考えれば妥当性がある。あるいは、観賞用よりも有用植物としての茶や油用(後述)の方が、価値が高いと考えたかもしれないし、単に花の色や図案の配置上の理由であったかも知れない。しかし、ここでは推測の域を出ないし、あまり重要なことでもなさそうである。

最後に、5000ドン切手の白花(図10)は最近の発見や再発見ではない。日本でいえばツバキよりもサザンカに近く、中国南部の広東、広西、雲南省などで種子から食用油をしぼるために栽培されてきた種である。古くにベトナム

ムから中国に入ってきたと伝えられ、1965年に中国の植物分類学者・胡先驕博士によって *Camellia vietnamensis* Hu (中国名は越南油茶：越南はベトナム、油茶は油用ツバキの意味) と命名された。ベトナムでも中国との国境近い北部地域の一部で油用に栽培されてきたが、国全体としてはあまり重要な経済植物ではない。むしろベトナムの名がついていることに意義があるものと思われる。

ところで、これらの切手が発行されるに至るまでには、さらに重要な背景がある。それは1993年から、最初はフランス、次いで我々も含めて日本からもベトナムツバキの調査団が入り、ハノイ大学との協力によって古い記録の種が



図10 *Camellia vietnamensis*

次々と再発見され、さらにその後は新種の発見も続いた。そのため、2002年1月にはベトナム植物学会や自然保護学会が主催し、日本ツバキ協会と国際ツバキ協会が後援してベトナムで初のツバキのためのナショナル・シンポジウムが開催された。このシンポジウムにはツバキの自生地見学も含まれ、ベトナム国内から研究者を中心に約110人、欧米から25人、日本からも16人が参加して主催者側を喜ばせた。結果として、このシンポジウムは、ベトナム原産のツバキ属植物が世界で注目され、また遺伝資源としてもきわめて貴重なものであるということ、とくにベトナム国内の研究者や為政者側に、認識させたということでも意義があったらしい。

今回のツバキの切手発行にはこのような経過と背景があったわけであるが、実はベトナムは世界のツバキ研究者や趣味栽培家の間では、昔から注目されていた国なのである。続いて、その理由について触れておきたい。

2. 中国とベトナムはツバキ属分布の中心地

ツバキ属植物というと、日本には青森県以南の各地に赤い花のヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. (通称・ヤマツバキ) が、秋田県から京都府北部にかけての日本海側の山地にはユキツバキ *Camellia rusticana* Honda (雪に埋もれて越冬し、春の雪解けと同時に赤花を咲かせるためにその名がある)、九州と四国から沖縄にかけての山地には白い花のサザンカ *Camellia sasanqua* Thunb. が自生していて、さらに、庭にはこれら自生種から日本で生まれた華やかな園芸品種がたくさんある。これら園芸品種は 1700 年代以降にヨーロッパ、次いでアメリカやオーストラリア、ニュージーランドなどに渡って広く栽培されるようになり、日本生れのツバキは、今では世界のツバキになっている。

しかし、ツバキの仲間全体 (植物分類学上のツバキ属) でいうと、それらの自生種は、西はネパールから、南はインドネシア、北から東は中国中部から日本の青森県までのアジア東南部の広い範囲に分布していて、総数は 200 種以上にも及ぶ。日本はその東北の片隅で、たった 4 種類 (上記のヤブツバキ、ユキツバキ、サザンカの他に沖縄には芳香をもつ小さな花をつけるヒメサザンカ *Camellia lutchuensis* T. Ito がある) が分布するだけである。つまり、観賞用ツバキの起源と発達地という点で圧倒的に日本なのであるが、分布する種の数も多く、ツバキ属全体の分布の中心地は、中国南部からベトナム北部へかけての地域なのである。中国の中部以南やベトナムには、日本のツバキやサザンカに近いが、観賞用あるいは有用植物としては、まだほとんど利用されていないツバキの仲間がたくさん存在するのである。

3. ベトナムには黄色い花のツバキがある

ベトナムがツバキの研究で注目されてきた理由がもう一つある。それは、はじめに述べたように 1800 年代末から 1900 年代初期にかけて、ベトナムがフランスの植民地であったころに採集されてフランスやイギリスに送られた腊葉標本の中に、花が黄色であるとメモ書きされたツバキの仲間 (標本の花は褐変していて本来の色はわからない) があり、それが 1910 年に *Thea*

flava Pitard (後に属名の変更により *Camellia flava* (Pitard) Sealy と改名) として発表されている。種小名の *flava* は‘黄色の’という意味である。

ツバキに多少関心を持った人であれば周知のことであるが、ツバキやサザンカの園芸品種には黄色い花のものではなく、日本でもヨーロッパでも、黄色い花のツバキを作り出すことが昔からの夢であるといわれてきた。

そのため、1910年のベトナム産‘黄色ツバキ’の発表以来、イギリス、フランス、アメリカ、日本など世界の各地から研究者や趣味栽培家、一攫千金を狙う人やその依頼を受けた人などが、この黄色い花のツバキを求めてベトナムに入った。しかし、ベトナムはその頃から、フランスからの独立戦争、第二次世界大戦それに続くベトナム戦争、その後の中越紛争、カンボジアとの紛争など引き続く戦火に曝されてきた。とてもツバキどころの状況下ではなく、それは長期にわたり再発見されることはなかった。そのため *Camellia flava* は完全に‘幻の花’、あるいは、実際には存在しない‘架空の花’なのではないかとさえいわれてきた。

ところが、1965年に今度はベトナムとの国境に近い中国側の広西自治区において、黄色い花のツバキが発見され、*Theopsis chrysantha* Hu (後に *Camellia chrysantha* (Hu) Tuyama と改名：中国名は金花茶) の名で発表された。中国の広西自治区ではその後も 10 種を超える黄色い花のツバキが発見され、これ以降は、幻の黄色いツバキの話題の中心はベトナムから完全に中国に移ることになった。また、黄色い花の自生種を使った園芸品種作出のための交配親としても専ら中国産の金花茶が使われることとなった。

4. ベトナムのツバキ切手第1号

ところで、ベトナムでツバキ図の切手が発行されたのは今回がはじめてではない。今から丁度 40 年前、第二次インドシナ戦争 (ベトナム戦争：1960～1975 年) 中の 1964 年に、当時のベトナム民主共和国 (北ベトナム) において、花の切手シリーズのうちの 1 枚として、現地で Hai Duong (ハイドゥン：語源は漢字の海棠と同じ) と呼ばれるベトナム原産の赤い花のツバキ *Camellia amplexicaulis* (Pitard) Cohen Stuart を図示した切手が発行さ

れた (図 11)。南北に分かれて争ったベトナム戦争が始まってから4年目である。どのような状況下で、また、花の切手シリーズにどのような意味があったのかまだ調べてないのであるが、仏教徒の多いベトナムでは、我々が想像する以上に仏壇から花を絶やさない。後日、この花は昔は正月の仏壇によく飾られたということ知るのであるが、このハイドゥンは丁度ベトナムの正月 (テト) に開花し、花は切手の図のように、つぼみの先が半分ぐらい開いたまま終わる独特のツバキである。花の形や色、正月の仏壇に飾ることなどから、多分夏の蓮をイメージした花だったのであろうと考えている。

この切手が発行されたのは、筆者がツバキの研究を始めるよりもかなり以前のことであるが、*Camellia flava* の黄色い花と、この切手になった赤い花、それからはじめに書いた *Camellia petelotii* の花の色の確認が、ベトナムにおけるツバキ調査の初期の目的になった。

5. *Camellia flava* の再発見と合同調査の開始

1993年12月に、東京大学理学部附属小石川植物園の研究者らによる、シダ植物を中心とした植物調査団がベトナム北部の国立公園など3ヶ所を訪れた。雑誌「園芸マニア」に載った紀行文の中に、はじめて紹介されるベトナム産植物に混じって、黄色い花のツバキの写真とともに *Camellia flava* らしいという短文があった。この調査の案内をしたのが現地ハノイ大学のニ



図 11 1964年発行のハイドゥン切手 (ベトナム民主共和国)

ン教授であった。また、後日の確認であるが、ベトナムでは *Camellia flava* の自生が現在では唯一確認されているニンビン省のクックフォン国立公園で採集された標本が、1965年にはニン教授により *Camellia flava* と同定されていた(図12)。しかし、この1993年の時点までは、その存在が世界に知られることはなかった。その理由は、ベトナムにおいては *Camellia flava* の再発見は、改めて世界に発表するほど重要なこととは考えられていなかったためである。



図12 幻の花といわれた *Camellia flava*

東京大学調査団からの情報をもとにして、筆者らは、ベトナム戦争末期のベトナムからの留学生で、現在はベトナムと日本間の貿易会社を営むト・ブ・ルーン氏の協力を得て、翌1994年からニン教授との共同調査を開始した。

1958年にイギリス・キュー植物園のロバート・シーリーが、主としてヨーロッパに保存されている腊葉標本をもとにまとめた著書「A Revision of the Genus *Camellia* (ツバキ属の改訂)」ではベトナムにはツバキ属の19種が存在するとされる。この著書とその中の引用文献を頼りに始めた1984年12月から2003年12月までの7回の調査で、所在が再確認できたものが12種で、残りの7種は今でも未確認である。以前に標本が採集されたと記録に残る地域でも、100年近くも経過すると、ゴム園や畑地などに変わったところも多く、一部の種はすでに絶滅した可能性もある。

それでも、1958年以降に存在が確認された種や新たに発表された新種もあり、さらに筆者らが共同調査はじめた以後の確認種と新種とを加えると、現

時点で既発表のものだけで 48 種に達する。既発表のものとしたのは、これからラテン語の記載文をつけて、できたら今年度中に発表しなければならない新種が少なくともまだ 4 種は存在するためである。

このように、予想通りあるいはそれ以上に、ベトナムはツバキ属植物の宝庫であった。にもかかわらず、引き続き戦火のため長期にわたりほとんど調査が行われなかった。本記事ではツバキ属に焦点をあてているが、実をいうとベトナムは隣接のラオスとともに、植物、動物、鳥、昆虫などに関心のある人にとっては、現在でも興味がつきない未知の国である。

最後に、今後の予定について。最近でも調査に行くごとに 1~2 の新種らしいものが見つかる。それはニン教授の予備調査や情報収集の結果でもある。そのため、これからは共同調査を続けることになるが、最終的には、ニン教授に協力してベトナム産ツバキ属植物のモノグラフを完成することであると考えている。

一方、ハノイ大学ではベトナム産のツバキを一ヶ所に集めたツバキ植物園の建設を計画し、前記のタムダオ国立公園内にすでに広い用地が確保できた。そこで期待されているのが日本における園芸植物の繁殖と栽培管理の技術である。今後、どのように協力できるかについては考慮中である。

参考文献

- 張宏達 山茶属植物的系統研究 中山大学学報 (自然科学) 論叢(1) : 1-180. 1981.
- 張宏達 金花茶組植物訂正 中山大学学報 (自然科学) 30(2) : 76-83. 1991.
- 箱田直紀・足立尚義. ツバキ属の原種. 西武舞鶴植物研報告 1:1-54. 1985.
- 箱田直紀・桐野秋豊. ベトナムツバキ調査報告. ジャパンカメラ 46 : 9-11. 1995.
- 箱田直紀・桐野秋豊. ベトナムのツバキ属原種とその新種. 椿 37 : 22-30. 1988.
- Hakoda, N. and T. Ninh. *Camellia flava*, Theaceae. Curtis's Bot. Mag. 18(4) : 190-193. 2001.

- Ho Ph, H. Cay co Viet Nam 1 : 527—537. Montreal. 1991.
- 胡先繡. 中国山茶属的連蕊茶属新種与新變種 (1). 植物分類学報 10(2) : 131—142. 1965.
- 広西環境保護局・広西植物研究所編著. 金花茶彩色図集. pp. 53. 広西科技出版. 南寧. 1992.
- Sealy, J. R. A revision of the genus *Camellia*. pp. 239. RHS. London. 1958.
- 津山尚. 金花茶. 椿 13 : 6—10. 1974.
- 村上哲明. 世界花紀行. 日本植物のふるさとベトナム. 園芸マニア 1994 (4) : 82—85. 1994.
- Ninh, T. Biodiversity of the genus *Camellia* of Viet Nam. Proc. First Nat. Symp. Yellow Camellia Viet Nam : 1—8. 2002.
- Ninh, T. and N. Hakoda. New species of the genus *Camellia* from Vietnam. Intern. Camellia Journ. 76—79. 1998.
- Ninh, T. and N. Hakoda. *Camellia petelotii*, a species of yellow Camellia from Vietnam. Intern. Camellia Journ. 81—83. 1998.
- Pitard, C. J. *Camellia*, in Lecomte, Fl. Gen. Indo-Chine 1 : 346. 1910.
- Rosmann, J. C. The golden Camellias of Vietnam. Intern. Camellia Journ. 29 : 74—80. 1977.
- 梁盛業主編. 金花茶. pp. 110. 中国林業出版社. 北京. 1993.
- 葉創興・許兆然. 关于金花茶組的研究. 中山大学学報 (自然科学) 31(4) : 68—77. 1992.